

「ペコちゃんの森」森林整備活動報告2007

9月14日(金)。天高く緑肥ゆる長野県黒姫にて、恒例の「刈り払い作業(=樹木の成長を妨げる雑草を切り払う作業)」が行われました。

2007年の参加者は、自然文化創造会議のメンバーを合わせて22名。初体験者も多い中、作業は滞りなく進行しました。



今年度のメニューは「C.W.ニコル氏の講和」「アファンの森財団の石井氏による『アファンの森』のお話」「刈り払い作業」の3つのプログラム。中でも「C.W.ニコル氏の講和」はご本人が登場するということもあり、参加メンバーの胸は多いに高鳴ります。

1. C.W.ニコル氏の講話



到着後、すぐに「C.W.ニコル氏の講和」行われました。

「葉っぱのクーラーが整えた空調の中で、街ではできない深呼吸をいっぱいしていただきます。」

ニコル氏ならではの、豊かな日本語表現が並ぶ挨拶から講話はスタートしました。



【黒姫アファンの森の『種』】

「アファン・アルゴード森林公園」—C.W.ニコル氏の故郷、英国ウェールズにあり、「黒姫アファンの森」の元ともなった公園です。講話はこの公園の話から始まりました。

今や1万ha(ヘクタール)の森が広がる「アファン・アルゴード森林公園」も、約半世紀前まではボタ山から流れ出た毒素に侵された荒地。「森の再生活動」によって、森は蘇ったのです。



「森の再生」に尽力するウェールズの人々の姿は、日本での大量伐採を目の当たりして絶望していたC.W.ニコル氏を奮い立たせました。

【黒姫アファンの森の『成長』】



「大量伐採に対して苦言を呈しているだけでなく、まずは自ら行動しよう。」

こうしてC.W.ニコル氏は黒姫の土地を買い、森林整備を始めたのです。

森の名前は「アファンの森」—C.W.ニコル氏を奮立たせた「アファン・アルゴード森林公園」にちなんで命名しました。

間伐(かんばつ)、水路の整備、巣箱の設置……。

手間ひまを惜みず整備した森は、少しずつ息を吹き返しています。



「整った自然環境は、なんだって潤せるんだ。人の心も、経済もね。」—C.W.ニコル氏はこう言って優しく微笑みました。

2. 石井氏による講和「アフンの森について」

続いて、財団の石井氏によって『アフンの森』紙芝居が行われました。



「美しい森がある」「ツキノワグマがいる」「人間の暮らしと融合している」という「驚き」、そして「伐採した木材を積んだトラックを目の当たりにした時の「絶望」—この2つが、C.W.ニコル氏の活動の原点でした。



現在「アフンの森」となっているこの土地、もともとはC.W.ニコル氏が自宅を建てるために購入していたのだそうです。自宅の代わりに「アフンの森」を作ったのです。

そして今回行う「刈り払い作業」—日本の森は現在、利用されないことによる危機にさらされているそうです。

手を抜くと笹やヤブが繁り、日の光が届かなくなった森林は次第に弱っていってしまう……。

森林の力を保つためには、人間が手をかける必要があるのです。



3. 刈り払い作業開始



C.W.ニコル氏、及び財団の石井さんによる「アフンの森」紙芝居で、「黒姫の森」や「刈り払い作業」に対する知識を深めたメンバーたち。

心の中で話を復唱しながら、刈り払い作業のスタート地点「サワグルミの木」を目指しました。

到着！！ さあ、刈り払い作業開始です！



【「しっかり虫除けて……」】



【「がんばるぞ！！」】

目の前に立ちほだかる、背高のっほの笹やヤブ……。
今年もなかなか手強い作業になりそうです。



櫻井社長もやる気満々！
会社の中とは一味違った涼々しい表情をしています。

「ペコちゃんの森」の全体が刈り終わるまで一同邁進！



あと半分となったところで小休止。
汗を流したあとお水のなんとおいしいこと！



【大分開けてきました】



【研究員たちの額に汗が光ります】

ゴール目指してあとひとふんばり。
櫻井社長も体力の限り鎌(カマ)を振ります！！



【「やったぜ！！」】

そして二時間後。見事「ペコちゃんの森」の全体の草刈が終わりました！！



終了直後の櫻井社長。
達成感に満ち溢れた表情をしています。

4.刈り払い作業を終えて

こうして二時間にわたる作業は無事終了しました。日の光が降り注ぐようになった「ペコちゃんの森」を見渡す参加メンバーの表情は、雑草が刈取られた森の姿を転写したかのような清々しいものでした。

森の恵みを吸収しながらの整備活動。終了後、メンバーの体には不思議とエネルギーが溢れていました。今回整備されたもの—それはメンバーたち自身なのかもしれません。



こうして無事終了した「森林整備活動'07」。潤った緑のステージで野鳥や昆虫が踊る「新生・ペコちゃんの森」の完成を夢見て、「不二家ファミリー文化研究所」の森林整備活動は続きます。

櫻井社長(兼ファミリー文化研究所 所長)の感想

「ペコちゃんの森にブナを植えたい」

秋から初冬にかけて山歩きをしていると「落ち葉の絨氈」を敷き詰めた場所に出くわすことがあります。この淡いセピア色の絨氈の道は心かかして歩きやすく、しかも一歩一歩ガサッ、ゴソッと効果音つきで歩くリズムをつくってくれます。

こういった道のある森は、いっぺんにたくさん葉を落とす落葉広葉樹が作り出したものです。その代表樹種がブナであり、程々に葉が腐食していくという性質も、良質の絨氈原材料の条件といえます。

ペコちゃんの森にブナを植えて、シンボルツリーのサワグルミのところまで「落ち葉の絨氈道」を作る。

そんなイメージを抱きながら実は笹狩りの作業をしていました。3年で笹を駆除し、4年目からはウッドチップで道のベースを作る。5年目からはいよいよブナの植樹作業に入る。10年目くらいでウッドチップは腐食してなくなり、落ち葉の道が現れる。道はどのような曲線にするのか。アクセントに階段もあったほうがいいのか。イメージと「年度計画」が頭の中をめぐります。どうも最近発想が「中期計画」(企業再建の道作りのこと)になってきているのです。

森の中期計画はレンジが長いのが特徴です。

皆さんもペコちゃんの森の未来をイメージしてみてください。いかがでしょうか。



研究員 古屋 の感想

今年から研究員の一人となり、初めて「ペコちゃんの森」森林整備に参加した。一番の収穫は、ニコルさんが語ってくれた「森や自然を次世代に残していく」ことを実践している背景や、森によせる想いを聞くことができたこと。

整備後の森全体の散策では自然と触れ合う事もでき、作業では目一杯の汗を流した。作業は大変だったが、自然の大切さを改めて認識できた一日だった。

【追伸】意外に若手が自然のことに関して経験・知識がないことを知り驚いたのも事実であった。

研究員 永井 の感想

『ペコちゃんの森』は、意外と町から近かったのが印象的です。

“森はなぜ整備しなければならぬのか？”“C.Wニコル氏はなぜ日本に来て森を守っているのか？”を聞き、大変勉強になりました。

研究員 橋 の感想

2年ぶりに訪れた森は、想像以上に、手を入れなければならぬ状態で、自然の力を知る事となりました。

<森の荒廃→再生→社会の再生→人の(壊れた)再生>

森に手を入れる事がそれらの一助に繋がるとは……！

研究員 栗田 の感想

「木の葉が周りの温度を下げているから、森の中はいつも風が吹いているんですよ」との話に、自然のメカニズムは、社内の組織においても同じであると感じた。

森(組織)を構成する木(人)がエネルギー帯に発していれば、森(組織)に風は吹き、森(組織)の中の淀みをなくし、活力ある木(人)を育て、様々な生命(組織)が提供できる価値を生み出すことができる。

日常の業務を離れ、自然の中で過ごす時間は楽しく、これからも積極的に参加したいと思う。

研究員 黒羽 の感想

「思考するのではなく五感をフル活用して下さい」という開会式でのC.Wニコル氏のことば通り、森の中で身体全体でフイトンチッド(*)を感じるに限る。

トリカブトの花、自然のツルによるブランコ、見たことも無いキノコ、樹木に残るクマの手形などなど、新鮮なものばかりであった。

都会の喧騒から離れて自然と融和することは、時間の流れを変える、日常を振り返る良い機会となり、心身ともリフレッシュできた。

今回の活動を通して、子供たちへも伝えていかなければならないことがたくさんあると感じた。これからのファミリー文化研究所の活動へ繋がるものと確信している。

*フイトンチッド…森の植物(主に樹木)が自ら作り出し、放出する揮発性物質のこと。これを人間が浴びることを森林浴と言ひ、リフレッシュ効果が得られる。(抗菌・消臭などの効果もあり)

研究員 黒瀬 の感想

『生えっぱなしになった樹木を刈り、地面に日光を当てることで植生が変わり、3年程経つと白樺などの本来そこに生えていた植物が再び地面に生まれ出てくる、それが森を作るといふこと』というお話には驚き、とても感動しました。

何もしないことが自然だと思っていたので、それはありとあらゆることに通じるなど開眼した気分です。

自然のままいることの大変さ、それは自分らしくいることの大変さと同じ、地道な努力を重ねた上に成り立つものなのですね。

研究員 手代木 の感想

今回の森林整備に参加して、いろいろなことを感じ、考えさせられました。

普段顔を合わせることの少ない他のメンバーとの交流や、素晴らしい大自然の中で、肉体そして精神が浄化され清々しい気分になったことは、とても貴重な体験でした。

研究員 小林 の感想

ニコルさんの話の中で、『ウェールズで人の力で荒地を森林に変えていった』という内容(アファンの森)がありましたが、地道に取り組むことにより、人間が自然を取り戻したことは大変すばらしいと思いました。日本でも近年、人々の努力で川や海に魚が戻っていることもあり、こうした活動が少しずつでも自然に寄与していれば、やがて大きな力につながるのではと感じました。

研究員 西江 の感想

「森は生きている」という、C.Wニコル氏の有名な言葉がありますが、『事実 森は生きていた』これが私の率直な感想です。

人間が整備しないと、森は死んでしまうということ、森が死ぬと人間を含めた他の動植物も死んでしまうということを知りました。

森から学ぶことがたくさんありましたが、C.Wニコル氏からも学んだことがあります。

それは、「周りの人を愛する心は、まず自分が変わらなければならぬ」ということです。私自身も口だけでなく、変わらないといけないと改めて思いました。

研究員 大町 の感想

2回目の参加となる今回。

前回聞いた「下草は3年刈るとあまり出てこなくなる」という話を思い出しながら、下草たちの伸び具合を確認すると、予想通りというか、予想以上というか、下草は伸びて伸びまくっていた。

前回の教訓を活かし、熱中症対策に持参したペットボトル3本の水も、作業終了時には見事にカラ。

手の握力はなくなり、体中汗まみれでも、心地よい疲労感を味わうことができました。アファンの森のようにいつかペコちゃんの森もなったらなあ。

研究員 鹿野 の感想

2年ぶりの「ペコちゃんの森」。

驚いた事に、2年前に皆で整備した場所は非常に綺麗な広場になっており大変感激しました。

今回印象に残った事は、財団の方の「お話」です。

中でもC.Wニコルさんの森と経済(社会)のお話は、非常に関心が持てる内容でした。町中で暮らしていると、感じる事すら忘れてしまう「森の大切さ」。

大切なことを改めて少し学ぶ事ができ、大変有意義な時間でした。

研究員 浜本 の感想

2年前の経験から、今回はベース配分を心がけていたのですが、刈り進むにつれスッキリと開けて行く森を見ているうちに、鎌を握る手にもつい力が入り、結局は全身大汗びっちょりのバテバテ状態に…。でも、これがまた、いいんですね！

毎度の事ながら、日頃手入れをして下さっているCCCのメンバーの皆様には、本当に頭の下がる思いです。森に対する愛情と情熱、ニコル氏の思想を実現するための行動力。

それは、たまにしか森に足を踏み入れない我々にはマネできない事ですが、ほんのわずかな時間でも、森に対する彼らの思い入れを共有する事で、我々もつかの間、『森の住人』になれるのが、この体験の何より素晴らしい所だと思います。

研究員 溝口 の感想

今回、初めて「ペコ森」の森林整備に参加し、入社以来、今まで経験のない業務？を経験することができ、有意義な2日間でした。

豊かな自然を守るために、積極的に森に手を入れることも必要なんですね。

「共生」って共に助け合い生きることだけでなく、何かの犠牲(助け)の上で、生かされることでもあるのかなど思いました。(食物連鎖的？)

決して自分ひとりでは生きていくのではなく、常に陰日なた、誰かの支えがあり、生かされていることを感じます。自分に自信を持つこと(信じること)は大切だけど、自分自身を過信しちゃいけないですね。

『ブナの木は数十年前には無駄な樹木として伐採されたが、いまは、森を再生する貴重な樹木として、その役割を認められて積極的に保護されている。(石井さん談)』

一面的な見方ではなく、物事を多面的に見ると、何か違う面(良さや意外な一面)が見えるものなんじゃないかな。

研究員 板橋 の感想

ファミ文研所属3年目にして始めて、「ペコちゃんの森」に行きました。

正直、どこからが森だかなんだか分からないくらい雑草たちが生い茂っており、少々引き気味でした。でも、社長をはじめ、参加者たちの「真剣な力まき」「みなぎるエナジー」に圧倒され、私も頑張らなくていいと触発されました。

いつの間にか草と友達になり、いい汗をかけた2日間でした。

5.番外編

草刈作業中に、様々な生き物を見つけました。



【セミのめけがら】



【タマゴダケ】



【カブトムシ】



【群生するキノコ】



【蜂の巣！】

森が作り上げた「遊具」。
山の神様や森のくまさんたちも、こうして遊んでいるのかもしれないね。



【木のブランコ】